

鉢の民家にミニ資料館開館

「石仏・語らいの家」木挽体験など多彩に

十日町市鉢の民家を活用した明治～昭和の暮らしを伝えるミニ資料館「石仏・語らいの家」が、1日(土)にオープンした。

「鉢の石仏」に近い築42年経過した尾身ミノさんの家(本人は新潟市在住)。尾身さんの夫で34歳にして他界した木挽職人・國政さんが使っていた木挽道具、大工の家で生まれた尾身さんが嫁いだ時の手作り嫁入りタンス、生活用品など暮らしの民具、関係した文書資料などを展示している。

尾身さんは十日町市博物館友の会の会員だった頃、自宅に残っていた義父と夫が使っていた木挽道具を市博物館に寄贈。一方、自宅に残っていた木挽道具や太子講に使った食器類、普段の生活用具、子供の遊び道具などを時間をかけて整理。家の2階を改築して資料館作りに取り組んでき

た。しかし、平成18年に脳出血で倒れ現在は新潟でリハビリ生活をおくっている。

尾身さんの願いは、資料館を開き、多くの人達から見てもらうことだった。その願いを、昭和51年度～52年度にかけて鉢の石仏を調査実習し、尾身さんの家にも宿泊した当時の立教大学博物館学研究室の卒業生達が実現した。

当時、中川成夫教授の下で、51年の夏には鉢の石仏を、翌52年には鉢集落の民俗を中心にした調査を行った。その時、教授や学生達も同集落の民家に分宿。現在も交流を続けている当時の学生も多い。

尾身さんの願いを受け、大地の芸術祭が開催され鉢でも作品が展開されることから卒業生を中心に実行委員会を組織、市博物館の竹内俊道館長、博物館友の会、

大地の芸術祭実行委員会、尾身さんのいとこ会、地元住民の協力で実現させた。

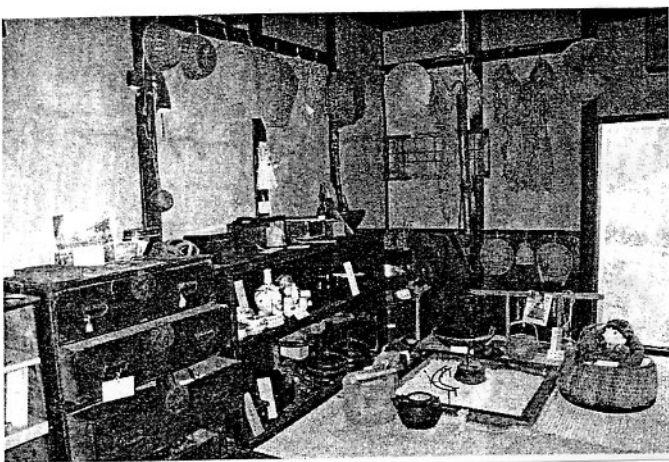
実行委員会の中心人物、当時の学生で尾身さんの家に泊った関脇洋子さんは「生活の中で使われてきたものばかり。多くの人から見てもらい、鉢住民の暮らしの一端に触れてほしい」と語っている。

開館は今月末までで、その後の予定は決っていない。

今月22日(土)～23日(日)には石仏駐車場付近で「木挽きの体験ワークショップ」が開かれる。世田谷区立次大夫掘公園民家園の文化財資料調査員の芝崎浩平氏、同園「木挽きの会」の上林歳明氏を講師に、22日は午後1時から体験会や木挽き解説。23日は午前10時から同様の催しを行う。参加は自由で無料。



オープンパーティーで看板披露



展示されている道具類